

獨協学園資料センター 第2回企画展

獨逸学協会学校と 文化芸術家たちの群像

— 巖谷小波・木下杢太郎・水原秋桜子・恩地孝四郎・大町桂月 —

2010年10月31日 ~ 2011年4月30日



(左から 水原秋桜子、木下杢太郎、巖谷小波、大町桂月、恩地孝四郎)

 獨協学園 資料センター

ご挨拶

獨逸学協会学校創立の目的はドイツの学問をベースに、わが国を近代化しようとするところにありました。ですから学校の特色は近代国家に必要な法曹官吏や医学者の養成にありました。しかしもう一つの特色として、この学校が「個人」を前提とする、すぐれた文化芸術家たちを生んだことも注目されます。この企画展では大町桂月・巖谷小波・木下柰太郎・恩地孝四郎・水原秋桜子を取りあげます。かれらの業績をとおり、近代文化史の中に占める獨協の位置を垣間見ることができれば幸いです。なお企画展開催にあたりましては、高知県立文学館・伊東市教育委員会・東京都現代美術館・十和田市役所から、多くの便宜とご協力を賜りました。記して感謝いたします。

2010年10月

獨協学園資料センター

獨逸学協会学校と文化芸術家たちの群像

明治大正期の獨逸学協会学校には、のちに一流の文化芸術家となって大成する人びとが在学していました。かれらはそれぞれの目的をもって、多感な中学時代を送っていたのです。巖谷小波(本名季雄)は、父代わりの兄から医者になることを期待され、厳しく学課の勉強を要求されていました。小説家を目指すかれは、書いた原稿を兄に発見されては破り捨てられ、いく度も暗涙にむせんだといえます。しかしやがて文才を発揮して、やがてだれもが認める児童文学の大家に成長していきました。木下柰太郎も家人の期待(医者への道)と自分の意志(文学芸術への道)との折り合いに苦しんだ一人です。かれの場合はどちらか一方を選択するのではなく、両方を併せ取り、医学分野でも文学芸術分野においても超一流の業績をのこしました。

水原秋桜子は医学分野に進んで、研鑽にはげむかたわら、俳句に打ち込みそこに豊かな人間感情を導入し、新たな境地を切りひらきました。そして戦争で病院を焼かれたのを機に医師をやめ、戦後(アジア太平洋戦争後)は全国で屈指の俳人(日本芸術院会員)となりました。恩地孝四郎は医学を目指したが第一高等学校の受験に失敗、東京美術学校に転じ芸術の道へとかじを切りました。恩地はヨーロッパの芸術思潮に共鳴し、志をともにする友人と、わが国で最初の抽象版画を始め、戦後は世界の画壇から評価されます。協会学校の初期に入学し、一年後に第一高等中学校に転じた大町桂月は、素朴な国粹主義の心情を美文でもって表現し、また飄逸な旅の文士として明治文壇に名をほしいままにしました。

明治後半から大正期にかけて多くの文化芸術家を輩出したのは、わが国の社会がこの時期になってようやく、都市的ブルジョア的な歴史の発展段階に入ったことと関係があります。獨逸学協会学校は都市的ブルジョア的な時代特有の雰囲気鋭敏に感じ取っていました。第4代校長大村仁太郎のころは、薫りの高いドイツ文化を媒介に、教養を重んじ「個人」を尊重する教育がおこなわれていたのです。戦争末期の空襲にさらされる日々にあって、東大の医局に執務する木下柰太郎は、後輩に向かって「君たちは知識と智恵を区別しなければならない。知識は人間が知的な活動を続ければ続けるほど無限に増えてゆく。でもいくら知識を積み重ねても、それでは知識の化け物になるだけだ」といい、人文的な教養の必要を説いたといえます。教養と人格を重視する明治中期の獨協を卒業した人らしい言というべきでありましょう。

■ 巖谷 小波 (いわや・さざなみ)

本名季雄 (すえお)。1870 (明治3) ~ 1933 (昭和8) 年。日本児童文学の祖。10歳のとき、留学中の兄が送ってくれたメルヘン集でドイツ語と文学に目覚める。獨逸学協会学校最初期の卒業生 (専修科は中退)。『こがね丸』(1891 (明治24) 年) は、日本児童文学の始まりとされる。その後、博文館で雑誌『少年世界』などの主筆として活躍、さらに『日本お伽噺』『世界お伽噺』シリーズで、日本の昔話の再話、世界の童話の紹介を行う。また、ドイツ文学移入期において、ドイツ語文献を翻訳し紹介に努めた。1900 (明治33) 年から1902 (明治35) 年まで、ベルリン大学付属東洋語学校講師としてドイツへ。帰国後は、お伽口演を全国で行い、「お伽のおじさん」として親しまれた。俳人としても知られる。



展示物

壁展示

① 掛軸「竜宮城」

年代不詳。小波は俳人としても知られ、季語集の編纂なども手がけたり、この「竜宮図」のような俳画も描いている。

ケース展示

① 小波から大村仁太郎への絵はがき 11点



ベルリン滞在中、小波はまめに仁太郎へ絵はがきを書いている。はがきは、現在のメールのようなメディアであり、ちょっとした連絡や、伝言に使われたりした。このうちの1枚は、獨協校舎の焼失について触れている。

協会学校焼失候 (そうろう) 事、御同
悲愁傷の至 (いたり) と存 (ぞんじ) 候、
何 (いず) れ近日拝眉 (はいび) 致申候

一月十六日 小波

② 『三十年目書き直し こがね丸』 (復刻版)

日本児童文学の嚆矢とされる『こがね丸』

(1891 (明治24) 年) を書いた小波を、森鷗外は「人まねせぬ一流のころ」と絶賛した。その文語体だった作品を、1922 (大正10) 年に小波自身が口語体書き直したもの。



③「獨逸語学雑誌臨時増刊 文学叢書 へるまんどろてあ」

1905（明治38）年出版。

ドイツの作家ゲーテ（1749－1832年）の叙事詩『ヘルマンとドロテア』（1796年）の小笠原昌齊による訳述を、山口小太郎（獨協のドイツ語教師）と共闘したもの。小波には、他に『獨逸文豪六大家列伝』（1893（明治26）年）という翻訳もある。



④ 文部省唱歌「ふじの山」（『尋常小学唱歌／文部省著』復刻版 獨協大学図書館所蔵）

巖谷小波の作詞による。1910（明治43）年、『尋常小学読本唱歌』が初出。小波は、他にも「一寸法師」などの歌詞も書いている。

⑤ 巖谷栄二編『小波童話名作集』

（主婦之友社、1945（昭和20）年（初版1942（昭和17）年）刊）

昭和20年（初版昭和17年）、355頁。装幀は恩地孝四郎による。表紙に描かれているのは、作品（全18編）に登場する主な動物や昆虫。「序」において、豊島與志雄（1890－1955年、『レ・ミゼラブル』などの翻訳で知られる）は、小波を「近代日本に、少年文学の大道をきりひらいた人」と賞賛している。

■ 木下 柰太郎（きのした・もくたろう）



柰太郎は1885（明治18）年、静岡県賀茂郡湯川村（現伊東市湯川）の商家の三男として生まれた。実名は太田正雄。医者になることを家人に期待された柰太郎は、1898（明治31）年に獨逸学協会学校中学に入学した。中学在学中から彼は文化芸術につよく惹かれた。クラスの中では雑誌とも会報ともつかぬ文集を作って、これを回覧しては友人と批評し合っていたという。また絵画を描くのが好きで、それは晩年になっても変わらなかった。しかし医学の道から逸れることは許されず、第一高等学校・帝国大学医科大学へすすむ。医学を学びながら、「パンの会」を中心に文化芸術の活動を続けた。かれは皮膚科の大家・ハンセン病の研究者として卓越した学問業績を残す一方、詩・戯曲・随筆・小説・評論・美術評論などに大きな足跡を残した。詩集では『食後の唄』、戯曲では『和泉屋染物店』『南蛮寺門前』が代表作。（伊東市教育委員会提供写真）

展示物

ケース展示

①『木下杢太郎全集』（岩波書店、1950（昭和25）年刊）（獨協大学図書館蔵）

『木下杢太郎全集』は全25巻からなる。杢太郎の文芸のすべてと医学研究の主要な論文が収載されている。らい病研究をすすめる患者救済につとめることと、詩・戯曲・小説・美術評論などの執筆・創作表現は、どちらも杢太郎の同じ人間性に根ざすものであった。

②『百花譜』（岩波書店、1979（昭和54）年刊）（獨協大学図書館蔵）

杢太郎（医学博士太田正雄）が自ら題した植物図譜である。原画の用紙は医学用箋である。晩年の杢太郎は研究の合間に植物園、大学構内、自宅の庭、あるいは郷里伊東の野に生える植物を採取した。そして鋭く冷静な科学者の眼と、愛情のこもった暖かい芸術家の眼と二つながらの眼をもって描きあげた。



③ 杢太郎の数学ノート（伊東市教育委員会提供）

もの慣れない訥々とした字には、まじめでコツコツと勉強に励む、中学生時代の杢太郎のすがたが目に浮かぶようである。

④ 杢太郎落書きノート（伊東市教育委員会提供）

さりげない戯れ絵であっても、その筆致・筆勢・描写力には尋常ならざるものが感ぜられる。戯れ絵のなかの卒業証書校長名が加藤弘之になっているが、実際に杢太郎が獨逸学協会学校中学を卒業した時は大村仁太郎が校長であった。

⑤『南蛮寺門前』（春陽堂、1914（大正3）年刊）

春陽堂、1914（大正3）年刊。杢太郎は大学二年のとき（1907年）、九州の天草や長崎、平戸などを周遊している。南蛮文化や切支丹思想に強い関心を抱いたのはこの時からと思われる。戦国時代末期の京都南蛮寺のまえを幻想的に描写したこの戯曲は、かれの創作活動のなかで一つの大きな節目となるものであった。外箱の版画は杢太郎の手になるものである。

イーゼル展示

① 宇佐美初津の山（複製）（『目でみる木下杢太郎の生涯』杢太郎会編より）



穏やかな郷里の山と海は、姉たちと水辺に遊んだ思い出とともに、杢太郎の記憶の中にはいつまでも残っていた。この絵は1906（明治39）年に描いたものである。

② 中学校時代の家族写真（伊東市教育委員会提供）

本家筋の太田家は、江戸時代には伊東湯川新宿で帆船を使い回漕業を営んでいた。その後杢太郎の祖父に当たる惣五郎が分家して米屋を開き「米惣」を称した。一家の人びとは読書を好む開明的気性に富んでいた。中学学生服を着た右隅の少年が杢太郎（太田正雄）である。



杢太郎から左に向かって、長男太田賢治郎（米惣四代目、第2代伊東市長）、齋藤十一郎（姉たけの夫）、次兄太田圓三（帝都復興土木局長、永代橋設計）、前列右端の女性が二姉きん（杢太郎に最も影響を与えた姉）、左の子どもは甥（三姉たけの息子）、左端の女性が三姉たけ（樋口一葉と共に写した写真が残っている）、抱かれている子どもは姪の齋藤浜子である。

■ 水原 秋桜子（みずはら・しゅうおうし）

秋桜子（本名豊）は1892（明治25）年東京市神田区猿樂町の医者の子として生まれた。父の医業はさかんであったようで経済的に恵まれ、また旗本の武士であった母方の祖父からは可愛がられ幸せな幼少期を送った。気が弱く引込み思案であった少年秋桜子は13歳のとき（1904（明治37）年）、獨逸学協会学校中学に入学した。学校には坪内逍遙と演劇運動に携わる東儀鉄笛や歴史教師の津田左右吉などがいた。中学時代にはクラスにおかれた文庫の本を読むのが楽しみであった。

第一高等学校在学中からは、『ホトトギス』（高浜虚子主宰）がもつ、自然そのものと直結する明るい俳句にひかれた。東京帝国大学医学部に学ぶころ、積極的に俳句にかかわり虚子との親交を深めた。しかしやがて虚子の「客観写生」の句法に疑問を抱き、主観抒情の重要性と作家精神の独立を主唱。「自然の真と文芸上の真」を執筆して『馬酔木』に掲載。『ホトトギス』から袂を分かった。

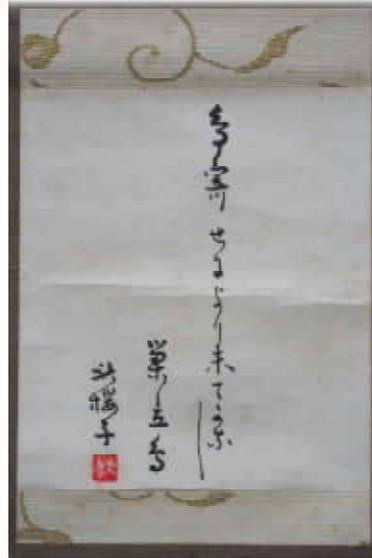


展示物

壁展示

① 掛軸 巢立ちの句

訓み「鳥寄せに より来てかなし 巢立鳥」



② 獨協医科大石碑拓本 訓み「花の下に やまひを救ふ 手を組まむ」

獨協医科大学は母校獨逸学協会学校（現獨協中学高等学校）の幹から生え出た大きな枝である。秋桜子はこの大学の誕生に、万感の想いを俳句に込めて祝意をあらわした。

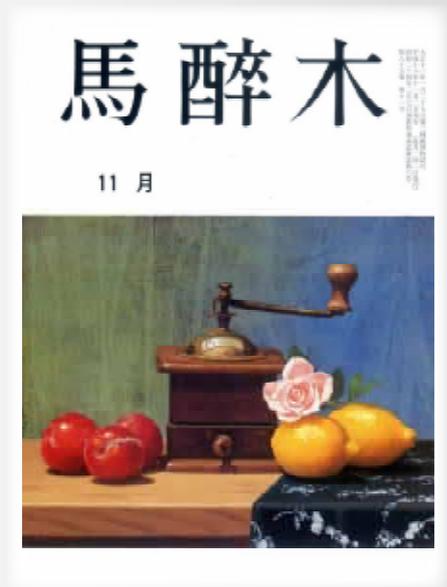
ケース展示

① 日本芸術院受賞写真（写真）

1964（昭和39）年秋桜子は芸術院賞を受賞した（写真後列中央が秋桜子）。この年の受賞者は、他に前列右から書の松井如流、洋画の岡鹿之助、同じく洋画の中川紀元、日本画の山本丘人、後列右から文芸評論の亀井勝一郎、一人おいて漆芸の辻光典であった。

② 『馬酔木』第八十五卷第十一号

これは『ホトトギス』の圏内にある雑誌であったが（『破魔弓』と称したが、のち改題）、秋桜子の虚子からの分岐ともなっていて独立した。



③ 秋桜子直筆の色紙

訓み「草紅葉 磯にのこれと 波くらし」

筆の運びには秋桜子の穏やかな性格がにじみ出ている。

④ 「秋桜子病院」（写真）

1928（昭和3）年。関東大地震で焼失した病院は、神田神保町に見事に再建された。秋桜子は東大の産婦人科医局を辞して病院にはいり経営にあたったが、太平洋戦争末の空襲でまた焼けてしまった。

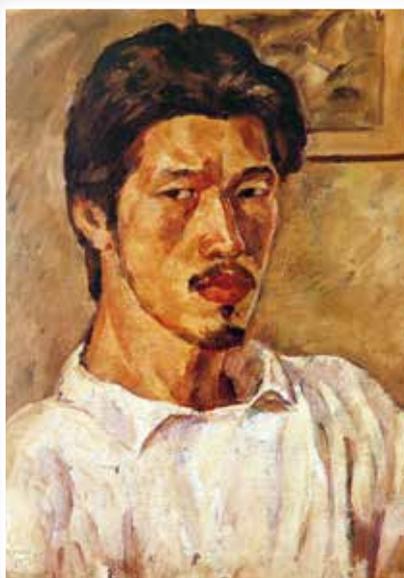
イーゼル展示

① 顕微鏡に向かう秋桜子（写真）

血清化学教室で学んだ秋桜子は、その後産婦人科教室にはいった。昭和の初めのころは、自家の産婦人科病院を経営する一方、宮内省侍医寮御用掛として週一度は宮内省病院へ出向かねばならず、繁忙の日々を送った。



■ 恩地 孝四郎（おんち・こうしろう）



1891（明治24）年～1955（昭和30）年。版画家、装幀家。獨逸学協会学校には、1904（明治37）年～1909（明治42）年まで在籍。卒業後、画家を目指して東京美術学校に進学。美術学校在学中より版画と詩の雑誌『月映（つくはえ）』を刊行。萩原朔太郎の詩集『月に吠える』（1917（大正5）年）、室生犀星『愛の詩集』（1918（大正6）年）などの装幀や挿画を担当。版画家として、また装幀家として知られるようになる。絵画の下に見られていた版画の地位向上に尽力した。ドイツ表現主義の画家カンディンスキーやロシア・フォルマリズムの影響を受け、日本における前衛的な抽象（版）画の先駆者の一人となった。その作品は、世界的に評価を受けている。

展示物

ケース展示

① 木版画「九段薄暮」

1938（昭和13）年。九段坂上にはかつて品川弥二郎邸があり、そこに獨逸学協会の最初の事務所が置かれた。恩地は、近代制作版画運動の推進者であった。



② 木版画「動物園」

この木版画は、もとは多くの版画家が参加して出版された『新東京百景』（1928(昭和3)～1932(昭和7)年)に収録されたもの(1929(昭和4)年)である。その同一版木を用い、1945(昭和20)年に刷り直して、『東京回顧絵図』（詳細不明）にまとめられたものと思われる。

③ 孝四郎装幀『はるかなる山河に 東大戦歿学生の手記』

初版1951(昭和26)年発行。装幀家としての孝四郎は、萩原朔太郎、室生犀星らの詩集、『北原白秋全集』の装幀など、多くの優れた仕事を残している

④ 『恩地孝四郎版画集』 形象社

1975(昭和50)年。380部限定。国内版のほか、海外版や特装版も部数限定で作られた。

⑤ 『版芸術』

1932(昭和7)年6月号(第3号)

美術評論家の料治熊太(りょうじくまた)編集による『版芸術』(1932～36(?)年)は、機械刷りの版画および芸術論、随筆、短編を掲載した。発行部数は400～500部。版画家では、恩地孝四郎のほか、棟方志功、畦地梅太郎、川上澄生などの作品が収められている。



イーゼル展示

① 孝四郎肖像写真

アトリエの恩地孝四郎。1949(昭和24)年撮影。この仕事場から、版画、装幀などの数々の作品が生み出された。なお、孝四郎には写真家としての顔もある。



■ 大町 桂月（おおまち・けいげつ）

桂月（本名芳衛）は1869（明治2）年土佐国の高知藩土佐郡北門筋八番屋敷に藩士の子として生まれた。明治の家禄廃止によって家は没落し少青年期には苦学をした。獨逸学協会学校に入ったとき（17歳・1885（明治18）年）、すでに学課の漢文には精通しており、力を入れたのはもっぱらドイツ語であったという。

一心に勉強した桂月は翌年協会学校を退学して第一高等中学校に転じた。そのころ彼は杉浦重剛の塾に通い、巖谷小波・江見水蔭とともに小説家三羽鳥と称せられていた。しかし協会学校在学中の小波とは微妙に肌合いが合わなかったようで、小波はのちに桂月とは「立場がちがって居た」と言っている。帝国大学の学生文士として世に知られた桂月は、日清・日露の両戦争のころには、厭戦の感情を詩にうたった与謝野晶子を攻撃した。晩年には各地を漂泊する旅の人生を送っている。桂月の精神と気風は杉浦重剛から多くの影響を受けたようである。

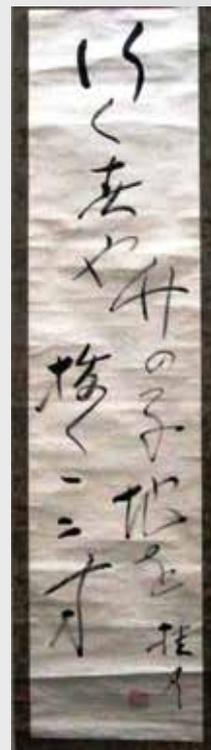


『大町桂月 随筆集 土佐編』
（高知県立文学館編集・発行所収写真）

展示物

壁展示

- ① 掛軸 訓み「いく春や 竹の子地を抜く 一二寸」



ケース展示

- ① 『桂月全集』 1、2



1926（大正15）年桂月全集刊行会。桂月の美文、韻文、紀行、日記、随筆、史伝、修養、その他が収められている。明治期の日本人の思想を知るのに好個の資料である。

②『伯爵後藤象二郎』

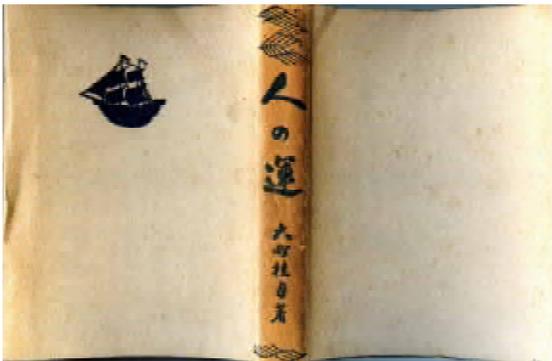
後藤象二郎は大政奉還を策して維新に貢献。政府頭官を歴任するも、征韓論争に敗れ下野。板垣退助らと民撰議院設立の建白に参画、自由党に活躍するが、板垣と外遊して運動から身を引く、そうかとおもえば反政府民権諸派の大団結運動の先頭に立ったりもし、しかも突如藩閥黒田内閣に入閣するという複雑な行動をとった。清濁併せ呑む「東洋豪傑」と評された後藤は、同じ土佐出身でもあった桂月に目をかけていた。その恩もあって桂月はこの伝記をあらわした。



③『筆』

広文堂書店刊、1913（大正2）年。若き学生文士として世に売り出した桂月は、筆一本で身を立てる以外にはなかった。叔父の負債による借金の苦しみと、酒による体調の乱れにもめげず、彼は膨大な著作を残した。

④『人の運』



研文書院刊、1928（昭和3）年。晩年の桂月は、処世術的な著書をよくあらわした。成功の三要素、鈍、根、運の中の「運」について述べている。

-
- * この展示作業に当たっては、獨協大学ドイツ語学科教授矢羽々崇氏の協力を得、獨協学園資料センター長・新井孝重が全体を監修しました。
 - * 展示物は適宜入替えることがあります。あらかじめご容赦ください。
-

年号	大町桂月	巖谷小波
		
1869(明治2)年	大町桂月(本名芳備)、高知藩土佐郡北門筋八番屋敷に生まれる。	
1870(明治3)年		巖谷小波(本名季雄)、東京麹町区平河町に生まれる。
1881(明治14)年	9月…獨逸学協会設立。	桂月、東京の山本塾で漢学をおさめ、文章に熟中。
1883(明治16)年	10月…獨逸学協会学校(Shule des Vereins für Deutsche Wissenschaften)設立。西周、第1代校長。	桂月(15歳)、明治義塾で漢詩を学ぶ。雑誌『穎才新誌』に初めての詩「夏日山行」が載る。
1884(明治17)年	10月…神田区西小川町に新校舎落成。	小波(14歳)、医学予備校に入り、ドイツ語を学ぶ。
1885(明治18)年	7月…専修科を設置。法律・政治の専門学を教授。	桂月、獨逸学協会学校へ入学。二級上に編入の巖谷小波と知己となる。
1886(明治19)年	11月…文部省より多額の補助金。	小波、硯友社に入る。尾崎紅葉らと交わる。
1887(明治20)年	4月…桂太郎、第2代校長。	小波、水蔭らと机を並べ小説家三羽鳥と称される。
1888(明治21)年		小波、『我楽多文庫』に処女作「五月鯉」を発表。小波、獨逸学協会学校普通科卒業。専修科に進学。
1890(明治23)年	7月…帝国大学総理・加藤弘之、第3代校長。	桂月、国粹主義雑誌『明治叢誌』に、はじめて「皇城拝観」を投稿し、文才を認められる。与謝野鉄幹らと交わる。
1891(明治24)年		小波、少年文学第一編『黄金丸』出版。幼年文学第二編『猿蟹後日譚』
1892(明治25)年	4月…獨逸学協会学校『校友会雑誌』第1号発刊。10月…本校普通科卒業生、第一高等中学校の相当級と接続。	桂月、帝国大学文科大学国文科に入学。
1893(明治26)年	7月…本校普通科卒業生、第一高等中学校医学部と接続。	
1894(明治27)年	9月…大村仁太郎・谷口秀太郎・山口小太郎、ドイツ語文典を発刊。	小波、日本昔噺(全24編)執筆開始。第一編『桃太郎』博文館より発刊。小波、博文館に入社。
1895(明治28)年		桂月、学内誌『帝国文学』創刊号に「病院」を発表。高山樗牛と親交を深める。土井晩翠・武島羽衣らと新俳詩会を結成。この頃から学生文士として世に登場する。
1896(明治29)年		桂月、塩井雨江・武島羽衣と共著『美文 韻文 花紅葉』を刊行。
1898(明治31)年		桂月、『美文 韻文 黄菊白菊』刊行。この頃、文名高まり、文筆が多かったが、叔父の負債に連累し多額の借金に苦しむ。
1899(明治32)年		桂月、借金返済のため文壇を離れ、中学国語教師として島根県に赴任。
1900(明治33)年		桂月、教師を辞して帰京。博文館に入社。
1901(明治34)年	4月…本校幹事・学習院教授大村仁太郎、ドイツ留学。12月…本校西小川町校舎、書庫など全焼。	桂月、この頃文筆活動もとても盛んであった。
1902(明治35)年	11月…小石川区関口台町に新校舎落成。	
1903(明治36)年	9月…大村仁太郎、第4代校長。	桂月、『処世訓』『第一筆の筆』など刊行。
1904(明治37)年		小波、獨逸語専修学校・早稲田大学文学部講師。ドイツ文学史を講ず。
1904(明治37)年		桂月、『露国征伐の唄』『軍国訓』などを著わし、日露戦争での国威宣揚を唱える。与謝野晶子の賦戦詩「君死にたまふこと勿れ」(『明星』掲載)を『太陽』誌上で攻撃。この頃から深酒におぼれ、仕事が乱れがちになった。
1905(明治38)年	5月…シラー没100年祭。ドイツ文化を宣揚。	
1906(明治39)年		桂月、博文館退社。『東京遊行記』刊行。
1907(明治40)年	6月…大村急逝。東京帝国大学教授・石川千代松、第5代校長。7月…東京帝国大学教授・長井長義、第6代校長。	小波、国定教科書編纂に参画。『少女世界』発刊。小波、主筆をつとめる。
1908(明治41)年	11月…獨逸学協会学校創立25周年記念祝典。	桂月、西園寺公望の文士招宴に出席。
1909(明治42)年		小波、首相西園寺公望との文士懇親会(両声会)幹事。
1909(明治42)年		桂月、『閑日月』刊行。清閑な文人生活をつづる。山水行脚の日を暮らす。
1910(明治43)年		桂月、『行雲流水』『関東の山水』刊行。各地を旅する。
1910(明治43)年		小波、世界お伽文庫(全50巻)発刊開始。
1911(明治44)年		桂月、『学生文庫』全45巻校訂・解説に取り組む。『新訳漢文叢書』訳注・解説に取り組む。
1911(明治44)年		小波、文部省設置文芸委員会の委員、ついで通俗教育調査委員会委員。
1912(明治45)年		
1913(大正2)年		桂月、前年・前々年と身内友人に病氣・不幸があり、自身も酒による胃病を患う。自伝「冷汗記」を著わす。
1914(大正3)年		桂月、『桂月文集』『伯爵後藤象二郎』を刊行。
1915(大正4)年		奎太郎、『唐草表紙』(?外・夏日漱石序文)を刊行。

芸術家年譜

木下 柰太郎	恩地 孝四郎	水原 秋桜子	年 号
			1869(明治2)年
			1870(明治3)年
			1881(明治14)年
			1883(明治16)年
			1884(明治17)年
木下柰太郎(本名太田正雄)、静岡県伊東市湯川に生まれる。			1885(明治18)年
			1886(明治19)年
			1887(明治20)年
			1888(明治21)年
			1890(明治23)年
	恩地孝四郎、東京府南豊島郡淀橋町に生まれる。		1891(明治24)年
		水原秋桜子(本名豊)、東京市神田区猿樂町に生まれる。	1892(明治25)年
			1893(明治26)年
			1894(明治27)年
			1895(明治28)年
			1896(明治29)年
柰太郎(13歳)、獨逸学協会学校中学に入る。			1898(明治31)年
			1899(明治32)年
柰太郎、この頃随筆とか創作様のもを書いて一冊につづり、クラスの中で回覧して批評を加えあった。学課のみの勉強にとらわれず、文芸・絵画に余力を割いていた。			1900(明治33)年
			1901(明治34)年
			1902(明治35)年
柰太郎、獨逸学協会学校中学卒業。ついで第一高等学校第三部(医学部)に入る。	孝四郎、獨逸学協会学校中分校(神田区西小川町)に入る(13歳)。		1903(明治36)年
		秋桜子(13歳)、獨逸学協会学校中学に入学。	1904(明治37)年
			1905(明治38)年
柰太郎、東京帝国大学医学部に入学。	孝四郎、獨逸学協会学校中学本校(小石川区関口台町)の第3年級に編入。		1906(明治39)年
柰太郎、新詩社同人となる。『明星』に「蒸気のほい」発表。			1907(明治40)年
柰太郎、この頃から森鷗外の知遇を受ける。			1908(明治41)年
柰太郎、雑誌『昂』に詩・戯曲・小説を発表。2月号には『南蛮寺門前』を掲載。パンの会に参加。北原白秋・長田秀雄と『屋上庭園』創刊。	孝四郎、獨逸学協会学校中学卒業。第一高等学校受験失敗。竹久夢二の知遇を得て多くの影響を受ける。		1909(明治42)年
柰太郎、この頃から絵画・美術批評を始める。	孝四郎、東京美術学校予備科西洋学科に入学。長原孝太郎らの白馬会原町洋画研究所に通う。		1910(明治43)年
柰太郎、『昂』に「和泉屋染物店」を発表。医学部卒業。	孝四郎、東京美術学校予備科彫刻科塑像部入学。竹久夢二・田中順之輔らと『都会スケッチ』発刊。西川光二郎『悪人研究』を装幀(最初の装幀か)。竹久夢二主幹雑誌『櫻さく國』に絵と詩を寄せる。	秋桜子、第一高等学校に入学。この頃から諸家の歌集を読みふける。	1911(明治44)年
			1912(明治45)年
柰太郎、この頃『朱楽』『アララギ』『昂』『三田文学』『中央公論』などに詩・小説・戯曲・評論をさかんに寄稿。	孝四郎、雑誌『少女界』第12巻第10号に文と挿絵を寄せる。雑誌『少年界』第12巻第12号に扉絵を寄せる。大概憲二・田中恭吉・藤森静雄らの同人雑誌『密室』に参加、詩二篇を寄稿。		1913(大正2)年
	孝四郎、DER STERN 木版画展(日比谷美術館)を観て、ヨーロッパの未来派・立体派・表現派の影響を受ける。この頃から版画を始める。木版画集『月映』を田中恭吉・藤森静雄とまとめ刊行する。機械刷200部限定で第7輯まで公刊。この時期の恩地の作品は日本近代美術史における抽象画の最初期のものと評価される。室生犀星と交友。	秋桜子、東京帝国大学医学部に入学。在学中に短歌を50首詠む。	1914(大正3)年
	孝四郎、『月映』表紙絵と木版画5点を発表。萩原明太郎と交友はじまる。東京美術学校退学。武者小路実篤『向日葵』を装幀する。田中恭吉遺作展(ひびや美術館)開催。		1915(大正4)年

年号	大町桂月	巖谷小波
1916(大正5)年	桂月、各地を旅行。『冷汗記』を刊行。	
1917(大正6)年	桂月、『美文 韻文 続花紅葉』を刊行。	
1918(大正7)年		小波、千姿万態の馬の絵を描き始める。千里閣(馬の玩具・器物陳列館)落成。
1919(大正8)年		
1920(大正9)年	7月…慈恵会医大学長・金杉英五郎、第7代校長。	桂月、土佐に帰郷。書会や講演で各地を回る。
1921(大正10)年		桂月、北海道を旅する。
1922(大正11)年		桂月、『桂月全集』全12巻刊行。
1923(大正12)年	9月…関東大震災。	桂月、『山水行脚 雲のゆくへ』刊行。
1924(大正13)年		桂月、奥入瀬渓谷蕨温泉10度目の冬籠り。
1925(大正14)年		桂月、蕨温泉にて死去(56歳)。
1926(大正15)年		
1927(昭和2)年		
1928(昭和3)年		
1929(昭和4)年	5月…陸大教授・司馬亨太郎(蘭学者司馬凌海子息)、第8代校長。	
1931(昭和6)年		
1932(昭和7)年		
1933(昭和8)年	10月…獨逸学協会学校創立50周年記念祝典。	小波、死去(64歳)
1934(昭和9)年		
1935(昭和10)年		
1936(昭和11)年	3月…法政大学学長・小山松吉、第9代校長。	
1937(昭和12)年	11月…財団名を「獨逸学協会」とし、学校名を「獨逸学協会中学校」と改める。	
1938(昭和13)年	3月…天野貞祐『道理の感覚』、政府・軍部の圧力で絶版。	
1939(昭和14)年		
1940(昭和15)年		
1941(昭和16)年		
1942(昭和17)年		
1943(昭和18)年		
1944(昭和19)年		
1945(昭和20)年	5月…東京山手空襲。校舎、火災を免れる。 8月…「終戦」の詔勅。生徒これをラジオに聴く。	
1946(昭和21)年		
1949(昭和24)年		
1951(昭和26)年		
1953(昭和28)年		
1954(昭和29)年		
1955(昭和30)年		
1957(昭和32)年		
1961(昭和36)年		
1964(昭和39)年	4月…獨協大学開学。	
1973(昭和48)年	4月…獨協医科大学開学。	
1981(昭和56)年		



木下 柰太郎	恩地 孝四郎	水原 秋桜子	年 号
柰太郎、南満医学堂教授・奉天病院皮膚科部長。中国東北部に渡る。	孝四郎、「日本美術家協会」を結成。小林のぶと結婚。室生犀星・萩原朔太郎刊の詩の同人雑誌『感情』の装幀を担当。以後終刊に至るまで毎号に版画・詩などを寄せる。		1916(大正5)年
	孝四郎、萩原『月に吠える』の装幀を担当。第五回二科展に出品したが落選。		1917(大正6)年
柰太郎、青島・済南・徐州・洛陽に遊び仏教美術を研究。	孝四郎、室生犀星『愛の詩集』を装幀。以後室生の書物の装幀を多く行う。「日本創作版画協会」創立に参加。『感情』第20号「恩地孝四郎抒情画集」を特集。そこに画論「抒情がについて」を掲載。	秋桜子、高浜虚子『進むべき俳句の道』の影響を受け俳句に傾倒。『ホトトギス』の購読をはじめ。東大医学部卒業。	1918(大正7)年
柰太郎、詩集『食後の唄』刊行。	孝四郎、第一回日本創作版画協会展に多くを出品。北原白秋『白秋小唄集』を装幀。以後白秋の書物の多く装幀を手掛ける。第6回二科展入選。	秋桜子、この頃朝日新聞歌壇(窪田空穂選)に作歌入選。「木の芽会」入会。「渋柿」句会にも出席。松根東洋城の指導を受ける。血清科学教室に入室。	1919(大正8)年
	孝四郎、恩地孝四郎個展(神田・兜屋画廊)。	秋桜子、『ホトトギス』への投句をはじめ。『破魔弓』同人となる。	1920(大正9)年
柰太郎、ヨーロッパ留学の旅に出る。	孝四郎、石川義一・大槻憲二・榎本秀夫・藤森静雄らと内在社を結成、文芸美術音楽誌『内在』を創刊。	秋桜子、『ホトトギス』例会に出席。虚子と交わる。	1921(大正10)年
柰太郎、医学博士学位取得。学位論文「癩菌の研究」。	孝四郎、日本版画協会編『詩と版画』第1輯に木版画(薄暮)、詩「友を偲ぶ」を発表。	秋桜子、京都での医学会に出席。そこで山口誓子と知己になる。東大俳句会を設立。『破魔弓』同人となる。	1922(大正11)年
	孝四郎、竹久夢二らと「どんたく図案社」を結成。大震災のため印刷所が潰れ、どんたく図案社は解散。この年、鶴見花月園少女歌劇部にはいり、舞台美術・台本・演出・作曲を担当。	秋桜子、『破魔弓』同人と井の頭公園に遊ぶ。	1923(大正12)年
柰太郎、ヨーロッパから帰国。愛知医科大学教授。	孝四郎、『詩と版画』第5輯に木版画・詩・論文・書評を寄せる。	秋桜子、『ホトトギス』課題句選者となる。『破魔弓』選者。産婦人科教室に入室。	1924(大正13)年
柰太郎の作品、小山内薫・久保田万太郎のものとともに『現代戯曲全集』第11巻に収載され刊行。	孝四郎、この頃日曜洋画研究所の講師をつとめる。		1925(大正14)年
柰太郎、東北帝国大学皮膚病の講座を担当。	孝四郎、前田夕暮『煙れる田園』・薄田泣薫『太陽は草の香りがする』・三木露風『お日さま』などの本を装幀。	秋桜子、医学博士の学位をうける。句文集『南風』を刊行。	1926(大正15)年
	孝四郎、第8回帝国美術院展入選。山田耕作作曲・北原白秋作詩『あわて床屋』など60曲以上の日本交響楽協会出版の楽譜を装幀する。	秋桜子、「近代俳句私考」を『ホトトギス』に寄稿。『近代俳句私鈔』を刊行。	1927(昭和2)年
	孝四郎、『アトリエ』第5年第1号に「創作版画回顧」を寄稿。第9回帝国美術院展に入選。川上澄生・平塚運一・藤森静雄らと卓上社を結成。第1回卓上社版画展に「東京風景」の一つ(神宮外苑競技場)その他を出品。	秋桜子、『破魔弓』を『馬酔木』と改題。自宅病院が完成。	1928(昭和3)年
柰太郎、『えすばにや、ぼるつがる記』刊行。	孝四郎、「創作版画倶楽部」創立に参加。「新東京百景創作版画」に取り組み。第1回創作版画協会展に(美人四季)(二重橋早春)(九段薄暮)などを出品。第10回帝国美術院展入選。東京風景版画展にて「新東京百景」のうち(二重橋)(明治神宮)(動物園)を出品。	秋桜子、『ホトトギス』400号記念俳句講演会で講演。テーマは「俳句に於ける自然描写」。	1929(昭和4)年
柰太郎、マニラ開催の国際癩委員会に出席。東北帝国大学評議員。『ルイス・フロイス一五九一、九二二年日本書簡』翻訳刊行。	孝四郎、「日本版画協会」が設立されると、これの常任委員となる。第1回新興版画展、審査委員をつとめる。	秋桜子、『馬酔木』にて、「自然の真と文芸上の真」を発表。『ホトトギス』から自立。	1931(昭和6)年
		秋桜子、宮内省侍医寮御用掛となる。	1932(昭和7)年
	孝四郎、詩画集『海の童話』を著わす。	秋桜子、「連作俳句の設計図」「俳句の本質」を『馬酔木』に寄稿。	1933(昭和8)年
	孝四郎、童話歌劇小曲集『ゆめ』を著わす。弘田龍太郎・服部龍太郎らと作曲をする。室生犀星の新聞小説挿絵を手がける。詩画集『季節標』を著わす。	秋桜子、『馬酔木』の主宰となる。	1934(昭和9)年
	孝四郎、ジュネーブ日本版画展に(湯上り)など6点出品。第11回国画会展に出品。会員に推荐される。中島重太郎主宰「挿絵倶楽部」創立に参加。日本現代版画展に出品。その後展観はアメリカ・イギリス・ドイツを巡回。	秋桜子、大阪馬酔木会の句会大会に出席。『俳句になる風景』『吾が俳句』刊行。	1935(昭和10)年
柰太郎、東京帝国大学医学部教授。	孝四郎、商工省の依頼により、パリ万国博覧会に木版画の制作工程を展示。	秋桜子、『冬雲雀』『若鮎』『岩礁』『魚鳥の句作法』など刊行。	1936(昭和11)年
	孝四郎、第2回文部省美術展(丘腹の稚牛)を無鑑査出品。第7回日本版画協会展に(新日本百景 台北東門)を出品。		1938(昭和13)年
	孝四郎、陸軍省囑託として中国へ行く。第8回日本版画協会展に大陸視察作品を出品。この年、関野準一郎・山口源と版画の研究会を自宅に開く。戦後まで継続。	秋桜子、『馬酔木』200号記念特集号発行。	1939(昭和14)年
	孝四郎、第9回日本版画協会展に(魚)(海の見える窓)を出品。紀元2600年記念を機に国威発揚の美術展が多く開催される。		1940(昭和15)年
柰太郎、レジオン・ドヌール勲章受章。日本癩学会にて講演、「現代の癩問題」。			1941(昭和16)年
柰太郎、『木下柰太郎選集』刊行。日本皮膚科学会にて学術報告「内分泌障害と皮膚疾患」。日本学士院・日本自然科学史編纂委員、「癩史」「印度医学」「南蛮医学」「日本梅毒史」など研究。	孝四郎、随筆と写真による『博物誌』を著わす。随筆集『工房雑記』を著わす。		1942(昭和17)年
	孝四郎、日本版画報国会創立の委員となる。詩画集『蟲・魚・介』を著わす。随筆集『草・蟲・旅』を著わす。		1943(昭和18)年
	孝四郎、戦時報国の版画活動ばかりが目立つ。二男が戦死。太宰治『パンドラの匣』新聞連載の挿絵を担当。		1944(昭和19)年
柰太郎、死去(60歳)。			1945(昭和20)年
		秋桜子、『馬酔木』の発行、ようやく順調になる。自選句集『喜雨亭句集』『春祭』『現代俳句の理念』刊行。	1946(昭和21)年
		秋桜子、『夜半亭燕村』刊行。	1949(昭和24)年
		秋桜子、『馬酔木』創立30周年記念号発行。	1951(昭和26)年
	孝四郎、第5回装幀美術展に「装幀三十年回顧展」なる特別展観を設ける。国際版画協会創立、理事長に選ばれる。「日本アブストラクト・アート・クラブ」を結成。純粋芸術と国際交流を目指す。画家・彫刻家・建築家・美術評論家からなる現代美術家の国際組織「国際アート・クラブ」(本部ローマ)の「日本本部」発足を準備。		1953(昭和28)年
	孝四郎、第18回アメリカ抽象美術展(ニューヨーク)に(リックNo17 不満と忍耐)他を出品。国際色彩木版画展(ロンドン)に(ポエムNo9 海)他を出品。		1954(昭和29)年
	孝四郎、サンパウロ・ビエンナーレ国際美術展日本出品作品国内展示会に出品。日米抽象美術展に出品。死去(65歳)。	秋桜子、『水原秋桜子選集』全五巻刊行開始。	1955(昭和30)年
		秋桜子、『馬酔木』400号記念号発行。	1957(昭和32)年
		秋桜子、『馬酔木』40周年。全国大会。	1961(昭和36)年
			1964(昭和39)年
		秋桜子、医科大学構内に句碑を建立。	1973(昭和48)年
		秋桜子(89歳)、死去。	1981(昭和56)年
			



獨協学園資料センター 第2回企画展 獨逸学協会学校と文化芸術家たちの群像

発行日 2010年10月31日

発行者 獨協学園資料センター センター長 新井孝重 〒340-0042 埼玉県草加市学園町1丁目1番地 獨協大学天野貞祐記念館1階